

訪再兵米元 地の墜落

対空射撃受け土浦で救出、捕虜に ブラウンさん (91)

太平洋戦争末期に操縦する爆撃機を撃墜され、霞ヶ浦に墜落した元米兵が10日、土浦市の墜落現場を70年ぶりに再訪した。撃墜後の半年を捕虜収容所で過ごしたあと帰国。霞ヶ浦湖畔に立った元米兵は「あの出来事が私の人生を変えた」と、苦い思い出を振り返った。



墜落現場に近い霞ヶ浦湖畔を訪れたチャールズ・ブラウンさん。右は次女ジエナさん。土浦市手野町

「私の人生変えた」 苦い記憶たどり



外務省の「日米草の根平和交流招聘プログラム」で招かれた元米海軍少尉チャールズ・ブラウンさん(91)。小笠原諸島父島で墜落しパラシュートで脱出、捕虜となったウィリアム・コネルさん(91)も同行し、阿見町の予科練平和記念館関係者が案内した。

記念館や本人の話では、ブラウンさんは1945年2月16日、日本近海の米空母から阿見町の霞ヶ浦海軍航空隊基地を攻撃するため飛び立った。初出撃だった。上空で対空射撃を受けて、土浦市手野町沖の霞ヶ浦に墜落。地元の住民の船で救出された。

憲兵隊の尋問のあと、神奈川県の大船捕虜収容所に連行された。収容後、東京都内の大森捕虜収容所に移送、終戦後の8月28日まで拘束された。帰国後は弁護士となり、50年間務めた。

ブラウンさんはこの日、霞ヶ浦の墜落現場の辺りに目をやると、「いくつか記憶がよみがえってきた」と言った。「当時は歓迎されない訪問でしたから、いいことはあまりない。愉快的な記憶ではありません」

女性にゲタで蹴られたこと、憲兵隊から銃を突きつけられて尋問されたこと――。ブラウンさんは言葉少なに苦い記憶を語った。

阿見町役場で天田富司男町長らと懇談もした。「戦前の志望はエンジニア。戦後、あの出来事を境に弁護士になろうと決意した。きょうは70年前と比べ素晴らしい経験をした。日米は友としてわかり合える」。ブラウンさんはそう話した。

(長田寿夫)